

生態批評主義論述下的有吉佐和子《複合汙染》閱讀風貌

曾秋桂

淡江大學日本語文學系教授

摘要

被譽為「情節編排高手」的有吉佐和子所創作的《複合汙染》一作(1974年至1975年間初次發表於《朝日新聞》報紙、單行本上下集於1975年問世)常被譏為「結構出現破綻」、「非小說形式之小說」等。

本論文依據生態批評主義主張之「環境思想方面從以人類為中心主義轉移至以環境為中心主義」、「以人類為中心主義的解體與以環境為中心主義」的觀點來閱讀《複合汙染》結果，清楚看出作家有吉佐和子透過文學作品抒發對於與大自然之協調、濫用農藥而產生環境之複合性汙染的關心以及勵行主張的軌跡。由此反觀，作品中描述的「選舉」、「環境汙染」、「消費者運動」等三大主題所緊密聯繫之公害問題，透過援用生態批評論述的觀點而作家想點出的問題點越加清晰、更形重要。由此反推一般認為的該作品前、後半部形成嚴重結構上分裂的情形，其實是使前後文緊密連結的關鍵，且為後半與大自然協調的重要主張一脈相繫。鑑此，援用生態批評論述的觀點來閱讀《複合汙染》是有其不可或缺的必要性。

關鍵字：生態批評主義、有吉佐和子、《複合汙染》、閱讀、不可或缺
必要性

Sawako Ariyoshi's "Fukugo Osen" read from eco-criticism

Tseng, Chiu-kuei

Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

Sawako Ariyoshi estimated as the story teller wrote "Fukugo Osen; compound pollution" is often called novel in which composition failed.

This paper has read and comprehended this work from the transition to an environmental center principle from the human center principle in the environmental thought and the demolition of a human center principle and a viewpoint of an environmental center principle by eco-criticism. As a result, Sawako Ariyoshi's literary concern involving the harmony with Nature, complex contamination of the environment by the agricultural chemicals to overwork, and the locus of practice is clarified. The pollution problem in which three elements of an election, environmental pollution, and a consumer movement shown in the work can be recognized the importance in question just by the viewpoint of eco-criticism. It has connected closely the first half and the second half with these three elements, in which it was estimated that this work was divided. And this work is carrying out the important opinion to harmony with Nature in the second half. Introduction of eco-criticism can tell necessity to reading of "Fukugo Osen".

Keywords: eco-criticism, Sawako Ariyoshi, "Fukugo Osen", reading, necessity

エコクリティシズムから読む有吉佐和子『複合汚染』

曾秋桂

淡江大学日本語学科教授

要旨

「ストーリー・テラー」と評された有吉佐和子の『複合汚染』（初出 1974-1975『朝日新聞』、単行本上下 1975）は、ややともすれば、「構成の破綻」、「型破りの小説」の悪評を受けている。

今回、エコクリティシズムの根幹を為す「環境思想における人間中心主義から環境中心主義への転移」、「人間中心主義の解体と環境中心主義」の観点から、『複合汚染』を読解した結果、大自然との調和、酷使する農薬による環境の複合的汚染をめぐる作家有吉佐和子の文学的関心と実践の軌跡の一端が明らかになった。ここから逆に考えると、「選挙」、「環境汚染」、「消費者運動」の三要素が絡む公害問題は、エコクリティシズムの視点によってこそ問題の重大さを認識できるという共通点によって、分裂していると言われた前半と後半を緊密に連結させており、後半の大自然との調和への大事な主張へと繋がっていくという構造をより明確に見出すことが出来た。これこそ、『複合汚染』の読みにエコクリティシズムの導入の必要性を裏付ける有力な証明だと言えよう。

キーワード：エコクリティシズム、有吉佐和子、『複合汚染』、読み、必要性

エコクリティシズムから読む有吉佐和子『複合汚染』

曾秋桂

淡江大学日本語学科教授

1. はじめに

『複合汚染』は1974年10月14日から翌年1975年6月30日の8ヶ月半にわたって、『朝日新聞』朝刊に連載され、1975年4月に上巻、7月に下巻が新潮社から単行本として刊行された。その創作目的について、有吉佐和子は「「告発」でもなければ「警告」でもありません。一人でも多くの人が、もう少し現実について知るべきだ」¹とし、「分かりやすく面白く書くこと」²を小説作法のモットーに、掲載を自ら進んで朝日新聞社の学芸部に頼んだという。その出来具合については、有吉が「分りやすく書いたものは、この作品の出来栄えとは別のところで、つまり読者の心の浅さや深さとかかわりを持つことになります。私が書きましたのは、具体例は実名入りで出しはしましたけれど、どちらかと言えば本質論だったつもりです」³と述べている。しかし、文壇では、「ストーリー・テラー」⁴と評されたにも関わらず、『複合汚染』には一貫した話の筋がなく、選挙に出馬した市川房枝、紀平悌子を実名で出した前半のリアルな政治的話題から作品が約6分の1進んできたところで、環境汚染の話題に飛びついたきり、小説がそのまま終わってしまったため、「構成の破綻」⁵、「型破りの小説」⁶と批判されている。その中で、長年、有吉の小

¹ 有吉佐和子(1975)「あとがき」有吉佐和子(2014・初1979)『複合汚染』新潮社 P610

² 有吉佐和子(1975)「あとがき」有吉佐和子(2014・初1979)『複合汚染』新潮社 P610

³ 有吉佐和子(1975)「あとがき」有吉佐和子(2014・初1979)『複合汚染』新潮社 P610-P611

⁴ 有吉佐和子(1975)「あとがき」有吉佐和子(2014・初1979)『複合汚染』新潮社 P610

⁵ 関川夏央(2006)『女流 林芙美子と有吉佐和子』集英社 P208

⁶ 奥野健男(1975)「解説」有吉佐和子(2014・初1979)『複合汚染』潮社 P615、

説を頑固に拒否し続けてきた文学研究者からは「有吉佐和子がついに純文学を書いた。『複合汚染』こそ、おれの考えている純文学の極致だ」⁷とされたこともあり、「現代に生きる文学者の魂がほとぼしりあふれている純粋な文学作品」⁸だと奥野健男は高く評価している。

賛否両論が両立している『複合汚染』が書かれた時代、丁度日本の国内では、「第二期目にはいった公害」⁹が本格的に取り上げられ、1970年の「公害国会」以来、産業公害と都市公害のゆえ、環境規制法制が施行されるようになった時期でもある¹⁰。これだけではなく、作品中頻繁にレイチェル・カーソン¹¹の『沈黙の春』（原文はサイレント・スプリングで、1962年の出版、1964年に和訳『生と死の妙薬』、1987年に和訳を『沈黙の春』に改めた。）、石牟礼道子の『苦海浄土』¹²（1969-2004）に言及したこと、さらに作品中で述べた「公害について、私がそれを主題とした小説を書こうとして準備に入ったのは十三年前のことであった」（P99）と明確に示した意図から、有吉が公害問題の提起を主眼にしたことは明白である。そこで、本論文では、視点をエコクリティシズムに据えて、公害問題を抜きにして語るができない『複合汚染』の読みを試みたいのである。エコクリティシズムに関する先行論究に照合すると、大抵エコクリテ

田村真八郎（2006）「有吉佐和子著『複合汚染』再読農薬はすべていけないか、などとは言っていない」『食の科学』6月号日本評論社 P46

⁷ 奥野健男（1975）「解説」有吉佐和子（2014・初1979）『複合汚染』新潮社 P616

⁸ 奥野健男（1975）「解説」有吉佐和子（2014・初1979）『複合汚染』新潮社 P616

⁹ 宮本憲一・有吉佐和子（1975）「対談 人間を複合汚染から救えるか」『潮』潮出版社 195号 P265では、宮本が「いま公害は第二期にはいり、第一期のように単一の企業やヒンビナートが急性の災害を出すという現象ではなく、種々の汚染源が慢性的に微量の汚染物を出し、それが複合して広い範囲に影響を及ぼすという現象が多くなってきました」と指摘している。

¹⁰ 寺田良一（2016）『環境リスク社会の到来と環境運動』晃洋書房 P3

¹¹ 星寛治（2004）「わが内なる有吉佐和子——“複合汚染”から三〇年に想う——」『土と健康』32(7)有機農業研究会 P3では有吉佐和子を日本のレイチェル・カーソンと見ている。

¹² 1969年に『苦海浄土——わが水俣病』を発表し、以後『苦海浄土・第2部「神々の村」』（2004）、『第3部「天の魚」』（1974）を加えて、『石牟礼道子全集』第三巻、第四巻に掲載し、その完成を見せてくれた。

ィシズムの根幹を為す「環境思想における人間中心主義から環境中心主義への転移」、「人間中心主義の解体と環境中心主義」と言った環境中心主義(自然)の観点から出した論考が多く見られる。そこで、そのエコクリティシズムの根幹を為す学説に基づいて、自然との対話に焦点を当てて、「純文学の極致」までと言われた『複合汚染』の考察を進めていきたい。

2. 『複合汚染』の概要と特色

『複合汚染』の題名について、作品では「複合汚染というのは学術用語である。二種類以上の毒性物質によって汚染されることをいい、二種類以上の物質の相加作用および相乗作用が起ることを前提として使われる」(P157)と定義されている。作品の粗筋は大変簡単明瞭である。第1人称の語り手である実名の有吉佐和子が前半で選挙運動の話をしておいて、排気ガス、保存料、殺菌料、殺虫剤、化学肥料、農薬、防腐剤、有機水銀、放射線、カドミウム、中性洗剤、環境ホルモン、合成物質、スモッグなどによって引き起こされた公害問題の問題提起へと進展していった。

2.1 前半と後半との分裂問題

よく触れられた前半と後半との分裂についてだが、文庫本 609 頁の分量がある『複合汚染』は市川房枝、紀平悌子が立候補した選挙運動から始まり、121 頁ぐらいから前半の選挙関係に登場した人物がいきなり消え、代わりに実名を有吉とした語り手が調査したり、関係者を訪問したりした後、なお「横丁の御隠居」との会話で話を弾ませている。こうして見ると、確かに作品は前半の選挙と後半の公害問題の二部に分裂したように見えるが、しかし、後半の公害問題は、実は有権者の前で「物価のかげにかくれて、もっともっと大切な問題が見逃されています。それは環境汚染という問題です」(P30)と訴えた紀平悌子の発言を聞いた語り手が、「選挙演説というよりも、消費者運動みたいだなあ」(P36)と感想を漏らした。その後、また「三千五百人から四千人の赤ちゃんが、奇形児、障碍児、難病、

奇病の持主だということを御存知ですか」(P35)と公害データに基づいて選挙運動員吉武輝子が環境汚染を訴えた発言の続きが見られる。これを見ると、作品は前半後半が断絶しているというより、有吉が意図的に考え出した構成に違いない。ここから作品中で「それでも十年前の勉強が、選挙の応援には役立っている。私には少くとも環境汚染に対する基本的な姿勢があったし、それは消費者運動の主張と全く同質なものであった」(P102、下線部分は論者による。以下同様。)と述べられているように、『複合汚染』を成立させた要素として実際の「選挙」、「環境汚染」、「消費者運動」の三要素があったことが分かる。その背後には、「毎日々々、食べている米にも、麺類にも、野菜にも、醤油にも、食用油にも、お茶にも、農薬が入っていないものはないのが現状だ。今は人体に無害とっている農林省も、厚生省も、いつかは梁瀬先生(奈良県五条市の一開業医のこと、論者注)と同じ結論に辿りつかざるを得ないだろう。しかし、待つてはられないから、私は書いている」(P323)という衝動に駆られている切迫した当時の状態があった。と同時に「日本文学古来の伝統的主題であった「花鳥風月」が危機にさらされているとき、一人の小説書きがこういう仕事をしたのがいけないという理由など、あるでしょうか。DDT と BHC が規制されて、ホタルやドジョウが息を吹き返してきていますが、都会にも農村にも奇妙な病人が増発している現状で、私は何もせずにはられませんでした」¹³という使命感も感じられよう。

2.2 コンテキストとして扱われた『沈黙の春』、『苦海浄土』—女性視点の強調

作品中、コンテキストとして扱われた先行作品に『沈黙の春』、『苦海浄土』がある。公害をテーマにするつもりでいた有吉が「石牟礼道子さんの『苦海浄土』が出るに及んで、私はもう公害というもの

¹³有吉佐和子(1975)「あとがき」有吉佐和子(2014・初1979)『複合汚染』新潮社 P613

は小説という虚構で捕えることができないのを思い知った。事実の重みが、あまりにも大きい。事態は、小説という読みものにのせるには、あまりにも深刻だ」(P102)と告白している。度々触れられた水俣病のことは正にその公害から受けた大きな衝撃を再現したものである。

一方、1960年代に日本国内で公害意識を高めることに少なからぬ影響を与えた『沈黙の春』も、度々作品中で触れられている。「この化学薬品の出現によって、自然の循環が破壊され、人間にとってどんな怖ろしい破滅が待ちかまえていることになるか。最初に激しい警告を発したのは、アメリカの海洋生物学者レイチェル・カースン女史であった。名著『サイレント・スプリング』がニューヨーカーという雑誌に発表されたのは一九六二年だった。日本ではそれから二年後に青樹築一氏の訳本が出版されている」(P127)と明確に記載している。また、「レイチェル・カースン女史が DDT に代表される殺虫剤は生物界の秩序を乱すと警告して『サイレント・スプリング』を発表した一九六二年(昭和三十七年)。それより一年も前に日本では奈良県五条市の一開業医が、「農業の害について」というパンフレットを自費出版していた。三代続いた仏教学者の家に生れた彼(梁瀬義亮・論者注)は、家で教えられる仏教的世界観と、学校で教育される科学的世界観のギャップに悩んで、理科へ進み、自然科学から人間の身に興味が移り、京都大学で医学を修めた。そして医学の基礎は生命力であることを悟ったのだった」(P298)とカースンに劣らないほどの先見の明を持つ日本人の存在を強調している。さらに、「もしレイチェル・カースン女史がまだ生きていたら、この二人の会見こそ世紀の顔合せであったろう。私は、公害国日本を「滅亡への急行列車」と名付けている外国の新聞記者たちに、梁瀬先生(化学肥料と農業の弊害を訴え続けている人・論者注)の存在をどうしたら知らせることができるだろうかと思っていた」(P319)と、実現する見込みのない世紀的な対面を夢見ている。あれほど、公害問題に警鐘を鳴らしたカースンだが、「レイチェル・カースン女史の警告以来 DDT

への糾弾が世界的に高まっている中で、PCB の生産は伸び続けた」(P476)と、利潤を追及する功利的な資本主義と科学の結合した現代社会の逆説的繁栄を皮肉っており、反省、傾聴すべきである。

上述した『沈黙の春』、『苦海浄土』の両作品が近代文明が産み出した高度産業社会のもたらす公害に世間の人々の目を向けさせた功績は非常に大きい。しかし忘れてはならぬのは、このような作品を書いた作家がいずれも女性だということである。星野芳郎が農薬と汚染が中心となった『複合汚染』が書けたのは女性作家だという発言¹⁴に対して、有吉が「子供に対する直接的な義務感」¹⁵を持つゆえ、またその義務感が「男よりも女のほうが強い」¹⁶としている。度々有吉に意識された『苦海浄土』の石牟礼道子は自分が女性作家であることについて、男性と女性との間に階級差のようなものが存在し、女性よりも男性の方が権力欲を持っていると指摘している¹⁷。さらに、世界的に見渡せば、長崎原爆投下による被爆を受け、原爆主題を追い続けている林京子(1930-)、チェルノブイリ事件について『未来の物語チェルノブイリの祈り』(邦訳 1997)を書いたスベトラナ・アレクシエービッチ(1948-)、東日本大震災後、根気強く原発をテーマに追求し、『献灯使』(2014)を書いた多和田葉子(1960-)はいずれも女性作家である。それを考えると、義務感が「男よりも女のほうが強い」と言った有吉の言葉、権力欲が女よりも男の方が強い

¹⁴有吉佐和子・華山謙・星野芳郎「座談会 複合汚染に救いはあるか」(1975)『朝日ジャーナル』Vol. 17No. 36 朝日新聞社 P4

¹⁵有吉佐和子・華山謙・星野芳郎「座談会 複合汚染に救いはあるか」(1975)『朝日ジャーナル』Vol. 17No. 36 朝日新聞社 P4

¹⁶有吉佐和子・華山謙・星野芳郎「座談会 複合汚染に救いはあるか」(1975)『朝日ジャーナル』Vol. 17No. 36 朝日新聞社 P4

¹⁷石牟礼道子(2004)「この世にあらざるように美しく」『石牟礼道子全集 不知火第三巻』藤原書店 P501-502 では、「男の人は存在的に政治テーマを持たずにはいられないと感じるわけです。女は権力というのはあまり好きじゃないんですね。そこに、男と女の階級差みたいなものがあるわけですが、(中略)男は一口に言えば、権力によって生きるし、女たちは全然そういうものではない方向性しか、男と生きていけないわけですから」と述べて、女性より男性が持つ権力欲を指摘している。

と言った石牟礼の言葉が一層意味深くなるろう。

2.3 戦略としての女性視点への回帰

公害問題提起以外に、社会的戦略でもその視点が女性に回帰する傾向が見られる。作品中、子供の保護者である有権者に向けて、「子供だけじゃありません。この排気ガスを吸い続け、毒のあるものを食べ続けたら、あなたたちどうなりますか。病気になるとは思いませんか」(P65)と言った語り手の有吉は、「反応があったのは男たちだけではなかった。大して興味もなさそうな顔で、ぼんやり立っていた女の人たちまで、急に驚いた顔になった。子供の手をひいていた主婦が、真剣な表情になったので、私はもう少し続けることにした」(P65)と述べている。また、「私は男女同権論者だが、子供の話になると男親は女親とまったく別の人類だという気がするので、困ってしまう」(P162)と自己の意思を示した上で、「全国母親の会や主婦連、婦人有権者同盟、消費者運動の根本精神は、これだと思う。女性たちが数において多く、男性よりはるかに熱心なのは、こと子供に関する限り、母親は実際的な責任者であり、男性のように社会の仕組みに対してすぐ絶望するような意気地なしがないからである」(P162)ということを理由に、生活の至るところにある複合汚染の厳しい問題について、男性より積極的に関心を寄せるのは女性だと結論付けている。このように、選挙に出馬した市川房枝、紀平梯子を囲む選挙運動員になった有吉、環境研究会のメンバー吉武輝子などの女性・主婦が「環境汚染と食品公害」(P36)を敷衍し、「異常出産の現状と子供の健康」(P36)を有権者に訴える社会運動の動きが作品で紹介されている。いわば、女性・主婦、選挙、環境汚染をつなぎ合わせたことこそ、有吉が仕組んだ社会運動の戦略だと言えよう。また、有吉が述べた「『複合汚染』の場合、都会と地方、単行本は同じように売れてます」¹⁸ことは確かかも知れないが、星野芳郎が

¹⁸有吉佐和子・華山謙・星野芳郎「座談会 複合汚染に救いはあるか」(1975)『朝日ジャーナル』Vol. 17No. 36 朝日新聞社 P7

『複合汚染』の読者対象は東京の主婦だ¹⁹と指摘したことも有吉が目論んで行ったことに違いない。

3. エコロジーとエコクリティシズム

エコロジーの由来、エコクリティシズムの定義と、文学・文化の批評への援用については、既に幾度か触れたことがある²⁰が、本論文では、その定義と援用を簡単に纏めることにする。

3.1 エコクリティシズムの定義

エコロジー・生態学(ecology)の概念に由来するエコクリティシズム・環境批評(ecocriticism・environmental criticism)は、批評理論・方法論として成立した。巴山岳人の論説²¹では、「エコクリティシズム(ecocriticism)」とは、20世紀後半における地球環境の破壊に対する危機意識を背景に形成され、生態学における諸概念や哲学などに見られるエコロジカルな思想を取り入れた文学批評のジャンルである。環境破壊の拡大に対し、文学の分野から積極的に関わっていくという姿勢、そして文学作品やその研究が環境問題の考察に非常に貢献するという意識がその特徴として挙げられる。「環境批評(environmental criticism)」とは、2005年にL・ビュエル(Lawrence Buell)がエコクリティシズムに代わる名称として提唱したもので、従来の「(原生)自然」に重きを置いた研究の範囲を拡大し、社会における種々のイデオロギーや制度とも交錯するハイブリッドな領域としての「環境」を射程に入れることを意図とされている。しかしながら、現在でも「エコクリティシズム」がこの批評

¹⁹有吉佐和子・華山謙・星野芳郎「座談会 複合汚染に救いはあるか」(1975)『朝日ジャーナル』Vol. 17No. 36 朝日新聞社 P7

²⁰曾秋桂(2014)「エコクリティシズムから読む日本原発文学—3・11を境に見る未来像を描いた「隣りの風車」と「不死の島」を中心に—」『台湾日本語教育論文集』第23号 P118-136 台湾日本語教育学会

²¹巴山岳人の論説は、<http://www.asle-japan.org/環境文学用語集/エコクリティシズム-環境批評-ecocriticism-environmental-criticism/>による。(2014年3月30日閲覧)

ジャンルを示す名称として一般的に使用されているという。

3.2 エコクリティシズムの援用

エコクリティシズム・環境批評 (Ecocriticism) は、松岡幸司の説²²では、文学作品を生態学的スタンスで捉える研究手法として、1980年代からアメリカを中心に発展してきた、「自然」や「環境」を中心に据えた文学研究であるが、実際には文学作品全般の環境意識や自然の位相のみならず、エコロジー (思想) の立場から文化全域に及ぶ新しいパラダイムを提示する文化批評といえることができる。山里勝己は、視点を「ネイチャーライティング」と「エコクリティシズム」との発展に据え、「ネイチャーライティング」が 80 年代にすでに市民権を獲得していたとしても、「エコクリティシズム」という、いまやあたりまえのように使われる批評用語が抵抗なく受け入れられるようになったのは、アメリカ文学・環境学会の初代会長をつとめたスコット・スロヴィックに言わせれば、1990 年代半ば頃のことであった²³としている。そして、その変化について「急速に拡大しつつあるジャンルを、われわれはいまネイチャーライティング (あるいは環境文学) と呼び、そのような文学を扱う方法をエコクリティシズムと呼ぶようになってきているのである」²⁴とした。さらに、エコクリティシズムの文学・文化の批評へ応用を、「テキストを緻密に読み解くことで斬新な結論に至り、さらには文学史的な洞察にまで深まるこのような手法はきわめて刺激的である。ここには詳細でたしかかな分析から滲み出る知的な興奮が感じられる」²⁵と高く評価した。それに先立って、野田研一は、エコクリティシズムの根幹については、「環境思想における人間中心主義から環境中心主義への転移で、エ

²²松岡幸司 (2011) 『『1842 年 7 月 8 日日蝕』: 翻訳と解説—ネイチャーライティングとしてのシュティフター』『信州大学人文社会科学研究』4 号 P143

²³山里勝己 (2005) 「書評野田研一著『交感と表象—ネイチャーライティングとは何か』松柏社、2003 年 6 月」『英文学研究』81 号一般財団法人日本英文学会 P236

²⁴前掲山里勝己論文 P238

²⁵前掲山里勝己論文 P238

エコクリティシズムの領野とは、文学における人間中心批判の遂行、およびその結果としての環境中心主義の可能性を探る試み²⁶と明示し、「人間中心主義の解体と環境中心主義は、とりもなおさず、縦走的にかつ歴史的に仮構されてある、私たちの身体と感性と思考の本性を解き明かす莫大な作業²⁷と付け加えて説明している。それに対して、山里勝己は「とりもなおさずエコクリティシズムの根幹をなす考え方である。そしてこれは人間を対象とするあらゆる学問分野をも射程におさめるものである²⁸と認識している。

そこで、上述した先行論究を参照し、エコクリティシズムの根幹を為す「環境思想における人間中心主義から環境中心主義への転移」、「人間中心主義の解体と環境中心主義」と言った観点から、『複合汚染』の読みを試みる。

4. エコクリティシズムによる『複合汚染』の試論

作品中、大自然の恩恵を受けてこそ、人間が生きていられることについて、多くの叙述がされている。例えば、以下のような記述が見られる。

- ① 太陽と水と土と緑。この大自然が、人間を生み、育て、成長させている。この最も大切な事実を、学校教育でも、家庭教育でも、教師や両親は忘れないでほしい。 (P308)
- ② 健康な土から、健康な農作物を作り、それを食べてこそ人間は健康に生きることができる。大地という自然の恵みなしに私たちは一日も生きることができない。 (P319)
- ③ 奈良県の梁瀬義亮氏は大自然が作る堆肥について山林で悟りを開いた。埼玉県須賀一男氏は藪の中の土を見て学ん

²⁶野田研一(2003)『交感と表象—ネイチャーライティングとは何か』松柏社 P201

²⁷前掲野田研一論文 P203

²⁸前掲山里勝己論文 P238

だ。自然から学ぼうとする謙虚な心に対して、自然は次々と惜しみなく知識を与えた。 (P342)

もし、科学ばかりを頼りにし、人間が大自然に相反する生き方を選ぶとしたら、以下のようなことになりかねないことが示唆されている。

- ① 国を支配する者にとって、忘れてならないものは大自然の動きである。 (P336)
- ② 初期の農業や畜産が、大自然を破壊し、その結果として国家をも消滅させた。 (中略) 人間は、大自然の強大な力を知って、それと闘ったり拒否したりするよりも、自然と折りあうことを覚えたのではないだろうか。これこそ、「調和」であり、もっとも理想的な科学であった。 (P374)
- ③ 新しい農民運動の指導者に宗教家が多いのは、人間以上の存在を信じる人々の方が科学万能主義の欠陥に気づくのが早かったからだろうと思う。人間が絶対者であるかのような錯覚が、科学を支配したとき、人間は科学によって支配され、今日の日本のような物質文明の危機にさらされることになった。 (P603-P604)
- ④ 大自然の中で、人間は他の生物と同じように、折合って暮して行く智慧を身につけるべきであったのに、それこそ本来の科学の役目であった筈なのに、ほぼ五十年ばかり前から科学そのものが大きく誤りをおかしていた。その結果、人類は人間の限界を忘れ、石油も、空気も、水にも限界があることを忘れて猛スピードで走ってしまった。日本は敗戦によってこのレースにおくれをとっていたが、戦後の焼けあとから立上ると、何も考えずに目の色を変えて今日まで走り続けてきた。 (P604)
- ⑤ 原子爆弾という大量殺人の兵器を作る目的で開発された技

術だということを覚えておく必要があります。どこの国でも原子力発電所は山と出る廃棄物の捨て場に困っているのが現状ですよ。あの廃棄物が持っている放射能は二十五万年も消えません。(P604-P605)

- ⑥ 原爆体験を持つ唯一の国日本に、被爆者援護法という法律が、まだ日の目を見ていない。ヒロシマの惨劇は世界に伝えられたが、あれから三十年、いま核武装している国は幾つあるか。(P605)

以上のように、有吉は大自然の恩恵を受けながら生活してこそ、人間が生きていられること、いわば、自然との調和的な生き方が打ち出されたのち、人間の限界を忘れて科学技術の開発ばかりに没頭し、人間生活に及ぼした化学物質汚染の公害問題、人類の命を奪った原子爆弾とその後遺症を作品で例に取上げている。今でこそ環境問題とそれを産み出す近代産業社会の問題は人類にとって最も重要な課題として認知されているが、明治以後の近代日本では、19世紀に由来する欧米の科学技術文明が絶対的正義であり学ぶべき価値観であったと言っても過言ではなかった。そして、第二次大戦の悲惨な敗戦後も日本では高度経済成長期に見られるように同じく欧米の物質文明価値観が社会を支配し、その矛盾が公害として社会に深刻な問題を産みだし始めていた。それらに対して明確な批判を初めて提起できたのは、レイチェル・カーソン、石牟礼道子に続く有吉佐和子であり、それらは近代文明への基本的価値観の変更を迫るポストモダンの先駆的動きとして評価できるであろう。有吉は、当時はまだ概念として明確ではなかった「環境思想における人間中心主義から環境中心主義への転移」、「人間中心主義の解体と環境中心主義」と言ったエコクリティシズムの根幹的観点を、先駆的に明晰に立証していたと言えよう。

5. おわりに

今までよく「構造の破綻」、「型破りの小説」と見られてきた『複合汚染』は、前半の選挙と後半の公害問題との分裂、亀裂があるため、確かにその誇りから免れることは出来ないが、しかし、本論文では、エコクリティシズムの根幹を為す「環境思想における人間中心主義から環境中心主義への転移」、「人間中心主義の解体と環境中心主義」の観点から、『複合汚染』は、大自然との調和を目指し、酷使する農薬による環境の複合的汚染の提起をめぐる作家の文学的関心と実践の軌跡であることが明らかにされた。作品中の重要要素である「選挙」、「環境汚染」、「消費者運動」の三つの話題は公害問題の提起に収斂しており、1970年代当時には明確ではなかった現在のエコクリティシズムの視点によって見れば、問題の重大さを認識できる。これら三つの共通点によって、分裂したと言われた前半と後半を有吉は緊密に連結させており、後半の大自然との調和への大事な主張へと繋がっていくという構造をより明確に見出すことが出来た。さらに、『複合汚染』で示唆された女性視点への回帰は、SES-Japan(The Society for Ecocriticism Studies in Japan、エコクリティシズム研究学会)のサイトに掲載されたエコクリティシズム研究の13項目のテーマにはいまだ反映されていない²⁹が、1960年代から1970年代、世界にまだ明確に環境問題の深刻さを提起する論者がいなかったとき、早く公害問題の重要性を提起したレイチェル・カーソン、石牟礼道子、そして、有吉佐和子という女性達は、まさに現代の環境問題論の先駆者と言える。これをエコクリティシズム研究の研究課題に付け加えてもよいかと思う。女性と環境の関係については、より多くの研究対象、研究事象を集めて、今後の研究課題としたい。

²⁹http://www.ses-japan.org/ecoc_themes/ecoc_themes.htm (2016年10月13日閲覧)では、「汚染と身体」、「自然の再発見」、「自然と植民地主義」、「土地の歴史と喪失」、「いきものを語る」、「食と農業」、「エコシステムの崩壊」、「アクティヴィズムと環境正義」、「都市環境と越境」、「音楽と映画」、「ティモシー・モートンの環境哲学」、「SFとエコロジー」、「日本SFにおけるポストヒューマンと女性SF」の13項目が掲載されている。

(本論文は、105年度科技部專題研究計畫(MOST105-2410-H-032-047)による研究成果の一部分である。)

テキスト

有吉佐和子(2014・初1979)『複合汚染』新潮社

参考文献

(一)書籍及び機関雑誌

有吉佐和子(1975)「あとがき」有吉佐和子(2014・初1979)『複合汚染』新潮社

有吉佐和子・華山謙・星野芳郎(1975)「座談会 複合汚染に救いはあるか」『朝日ジャーナル』Vol. 17No. 36朝日新聞社

石牟礼道子(2004)「この世にあらざるように美しく」『石牟礼道子全集 不知火第三巻』藤原書店

ウルリヒ・ベック著・東廉・伊藤美登里訳(2011・初1998)『危険社会新しい近代への道』法政大学出版局

奥野健男(1975)「解説」有吉佐和子(2014・初1979)『複合汚染』新潮社

加藤貞通(2007)「環境文学入門：自然とのコミュニケーションを回復する」『メディアと文化』第3号

佐倉統(2006)「有吉佐和子『複合汚染』「普通の問題群」にした功と罪」『論座』6月号朝日新聞社

関川夏央(2006)『女流 林芙美子と有吉佐和子』集英社

曾秋桂(2013)「3・11以後日本文学の振幅—『それでも三月は、また』における「原発」の課題—」『台湾日本語文学学会学報』33号台湾日本語文学学会

曾秋桂(2014)「エコクリティシズムから読む日本原発文学—3・11を境に見る未来像を描いた「隣の風車」と「不死の島」を中心—」『台湾日本語教育論文集』第23号台湾日本語教育学会

多田満(2006)「R. Carson『沈黙の春』と有吉佐和子『複合汚染』にみられる化学物質の生態への影響」『文学と環境』9月号文学・環境学会

- 田村真人郎(2006)「有吉佐和子著『複合汚染』再読農薬はすべていけないか、などとは言っていない」『食の科学』6月号日本評論社
- 寺田良一(2016)『リスク社会の到来と環境運動』晃洋書房
- 野田研一(2003)『交感と表象—ネイチャーライティングとは何か』松柏社
- 星寛治(2004)「わが内なる有吉佐和子——”複合汚染”から三〇年に想う——」『土と健康』32(7)有機農業研究会
- 松岡幸司(2011)「『1842年7月8日日蝕』: 翻訳と解説—ネイチャーライティングとしてのシュティフター」『信州大学人文社会科学研究』4号
- 宮本憲一・有吉佐和子(1975)「対談 人間を複合汚染から救えるか」『潮』潮出版社195号
- 山里勝己(2005)「書評野田研一著『交感と表象—ネイチャーライティングとは何か』松柏社、2003年6月」『英文学研究』81号一般財団法人日本英文学会
- レイチェル・カーソン著青樹築一訳(2012・初1975)『沈黙の春』新潮社
- (二)インターネット資料
- 巴山岳人の論説
- <http://www.asle-japan.org/環境文学用語集/エコクリティシズム-環境批評-ecocriticism-environmental-criticism/>による。(2017年2月20日閲覧)
- エコクリティシズム研究学会
- http://www.ses-japan.org/ecoc_themes/ecoc_themes.htm(2017年2月20日閲覧)

※2017年2月28日原稿受理 2017年4月9日審査通過